

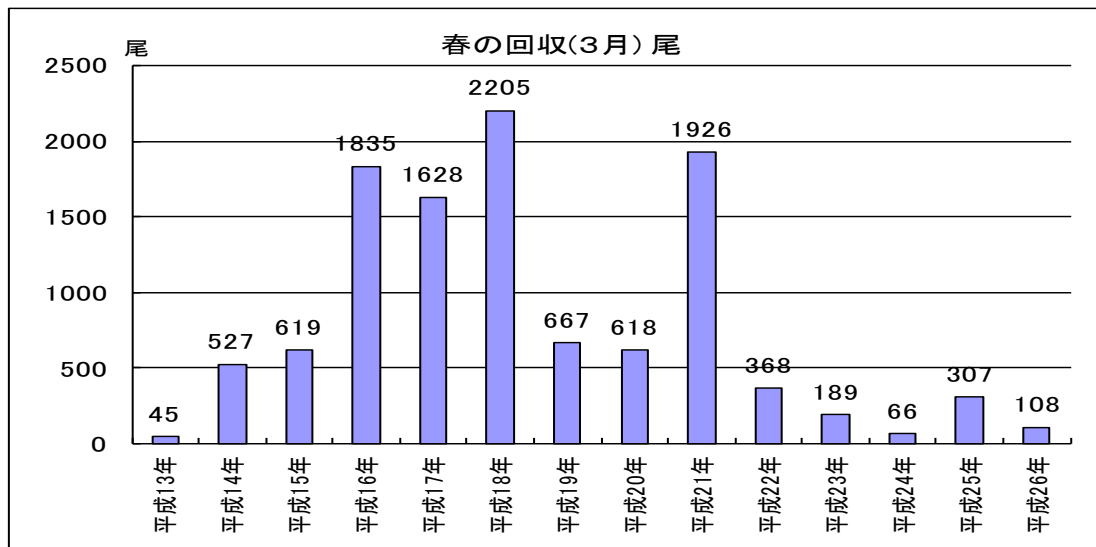
## 天然記念物・ヤリタナゴの絶滅回避に向けた保護活動

ヤリタナゴ調査会 斉藤裕也

群馬県下にはかつて5種の在来タナゴ類が東毛地域を中心に生息していました。そしてすでに4種が絶滅しているのです。現在、多々良沼や城沼には外来種のタイリクバラタナゴのみが生息し、在来タナゴ類は生息せず、県下には藤岡のヤリタナゴが1個体群残るのみとなっています。最も早く生息記録が絶えたのはミヤコタナゴで昭和24年に館林の城沼で採取された記録のみでベンタナと呼ばれていたと記述されています。ついでゼニタナゴで、かつては平野部の池沼に多く生息しヤスリメと呼ばれたようですが、昭和29年に館林の城沼で採取された記録を最後に姿が消えました。その次はタナゴで昭和43年に館林の城沼で採取された記録が最後でした。そして4番目はアカヒレタビラで板倉町の沼で昭和53、54、55年と継続して記録された後に記録されなくなり絶滅しました。全ての在来タナゴ類が絶滅したのではないかと推定される中で藤岡のヤリタナゴが発見されたのです。

関根和伯氏が昭和59年8月にヤリタナゴを藤岡市内で発見し、その経緯は藤岡市誌(1989)に記述されています。同氏はヤリタナゴの保護を呼び掛けましたが保護はされず、平成10年11月に14年ぶりに私達が再発見するまで放置されていました。再発見場所を中心に生息状況を調べてみると、藤岡市下戸塚の古い形状の岡之郷用水とその上流側の笹川(神流川支流)のみに局所的に生息しており、生息数は30尾程度と少ないものでした。

表1 岡之郷用水のヤリタナゴ確認数



岡之郷用水は泥を掘った用水路で主に砂底で構成され産卵母貝のマツカサガイが生息していました。個体数が少ない原因を調べてみると、主たる生息地である岡之郷用水では、早春に流域の集落ごとに泥上げ作業が別々に行なわれており、その度に断水して瀬切れ現象が起き、干し上げられて死亡するヤリタナゴが少なからず見られたのです。

平成12年7月にはヤリタナゴとともに産卵母貝のマツカサガイ、貝の幼生の寄生相手であるホトケドジョウが同時に藤岡市の天然記念物に指定されて法律的に始めて保護の対象となったのです。保護を開始した平成13年(2001)から泥上げ作業の日を集約して1日に決めて実施し、断水した瀬切れ現象を利用してヤリタナゴを採取して個体数をカウントする機会としました。この対策だけで個体数の増加は目覚ましく、平成13年に45個体だった確認数は3年後には1800個体にまで増加して、遺伝的に多様性を維持できる可能性が出てきました。そして平成18年には2000尾の水準を越す個体数が確認されるようになりました。しかし、その後は大切な越冬場所を水路改修で破壊されてから400個体以上は確認できなくなってしまいました。また、下戸塚の岡之郷用水の周囲のほ場整備計画が動きだし、この地だけで繁殖地を確保するのはリスクが高すぎ、別の生息地を造る計画を進めています。本郷地区は下戸塚より上流に位置し、産卵母貝のマツカサガイが良好に生息するものの、これを外来種のタイリクバラタナゴが利用し、ヤリタナゴは生息していなかった場所です。この場所のタイリクバラタナゴを駆除して2013年からヤリタナゴを放って、ヤリタナゴの個体群を形成する目的で対応をおこなっています。しかしこの場所も整備事業が始まり、生息地の危機は続いています。

